

リード・マラー標準形 どんなブール関数 $f(x_1, \dots, x_n)$ も、「0 または 1 を係数とする、ブール変数の積からなる項 $x_1 \cdots x_i$ ($0 \leq i \leq n$)」の排他的論理和 (\oplus) として表わすことができる。係数が 0 の積項は \oplus する必要がない ($x \oplus 0 = x$ だから) ので省略してもよい。このことは任意のブール関数は \cdot と \oplus と定数 1 だけで表わせることを意味する。

定理 5.8 $f(x_1, \dots, x_n)$ を任意のブール関数とする。 $f(x_1, \dots, x_n)$ に よって定まる定数 $A_{\langle n C_i \rangle} \in \{0, 1\}$ ($i = 0, 1, \dots, n$) を用いて

$$\begin{aligned} f(x_1, \dots, x_n) = & A_0 \oplus A_1 x_1 \oplus \cdots \oplus A_n x_n \\ & \oplus A_{12} x_1 x_2 \oplus \cdots \oplus A_{(n-1)n} x_{n-1} x_n \\ & \oplus \cdots \\ & \oplus A_{12 \dots n} x_1 x_2 \cdots x_n \end{aligned}$$

と表わすことができる。ここで、 $\langle n C_i \rangle$ は $1, \dots, n$ から i 個を選んで並べた添え字 ($\binom{n}{i}$ 個ある) を表わす。ただし、 $A_{\langle n C_0 \rangle} := A_0$ とする。

これを $f(x_1, \dots, x_n)$ のリード・マラー展開とかリード・マラー標準形という (I.S.Reed, D.E.Muller, 1954)*。

この定理を証明する前に、排他的論理和の性質を見ておこう。

補題 5.9 $xy = 0 \iff x \oplus y = x + y$.

証明 (\implies) $xy = 0$ とすると、

$$\begin{aligned} x \oplus y &= x\bar{y} + \bar{x}y \\ &= (x\bar{y} + xy) + (\bar{x}y + xy) && (xy = 0) \\ &= x(\bar{y} + y) + (\bar{x} + x)y \\ &= x1 + y1 = x + y. \end{aligned}$$

*Reed-Muller expansion, Reed-Muller canonical form. 環和標準形とかガロア標準形ともいう。これらの名称は、後述するように $(\{0, 1\}, \oplus, \cdot, 0, 1)$ が \oplus を加法として環をなすこと、また、^{たい}体をもなし、それはガロア体と呼ばれることによる (7.1, 7.2 節および 7.3 節参照)。リード・マラー展開で表わされたブール関数は論理回路として組んだときに動作テストがしやすいなど、実用的にも有用な標準形の 1 つである。

(\Leftarrow) 真理表を書いてみればすぐわかるように, $x \oplus y = x + y$ が成り立つのは $x = y = 1$ 以外の場合だけである. すなわち $xy = 0$.

補題 5.10 \oplus は次の性質を満たす.

- (1) $x \oplus y = x\bar{y} + \bar{x}y = (x + y)(\bar{x} + \bar{y})$
- (2) $x \oplus (y \oplus z) = (x \oplus y) \oplus z$ (結合律)
- (3) $x \oplus y = y \oplus x$ (可換律, 交換律)
- (4) $x(y \oplus z) = xy \oplus xz = (y \oplus z)x$ (分配律)
- (5) $x \oplus x = 0, x \oplus 0 = x, x \oplus 1 = \bar{x}$

証明 真理表を書いて確かめよ (問 5.26 参照).

定理 5.8 の証明 $\langle_n C_i \rangle$ は $1, \dots, n$ から i 個を選んだ組合せの 1 つであることを思い出そう.

$$A_{\langle_n C_i \rangle} = \bigoplus_{a_1, \dots, a_n \text{ に関する条件}} f(a_1, \dots, a_n) \quad (5.4)$$

であることを示す. ここで, “ a_1, \dots, a_n に関する条件” は,

$$\begin{cases} \langle_n C_i \rangle \text{ が } j \text{ を含むなら } a_j = 0, a_j = 1 \text{ の両方の場合を (5.4) 式に } \oplus \text{ する} \\ \langle_n C_i \rangle \text{ が } j \text{ を含まないなら } a_j = 0 \text{ の場合だけを (5.4) 式に } \oplus \text{ する} \end{cases} \quad (5.5)$$

である. また, $A_{\langle_n C_0 \rangle} = A_0 := f(0, \dots, 0)$ である. 例えば, $\langle_3 C_2 \rangle = 12$ の場合 (12 と 21 は同一視して一方しか考えない), $A_{\langle_3 C_2 \rangle} = f(0, 0, 0) \oplus f(0, 1, 0) \oplus f(1, 0, 0) \oplus f(1, 1, 0)$ である.

$f(x_1, \dots, x_n)$ が変数を 1 つ以上含むときは, 定理 5.7' より, 主加法標準形

$$f(x_1, \dots, x_n) = \sum_{(a_1, \dots, a_n) \in \{0, 1\}^n} f(a_1, \dots, a_n) \cdot x_1^{a_1} \cdots x_n^{a_n}$$

で表わすことができる. $(a_1, \dots, a_n) \neq (a'_1, \dots, a'_n)$ ならば $a_j \neq a'_j$ なるペアが存在する (そのとき, x^{a_j} と $x^{a'_j}$ は互いに他の否定である) ので $(f(a_1, \dots, a_n) \cdot x_1^{a_1} \cdots x_n^{a_n})(f(a'_1, \dots, a'_n) \cdot x_1^{a'_1} \cdots x_n^{a'_n}) = 0$ である. よって, 補題 5.9 より, (5.4) 式の論理和 \sum は排他的論理和 \oplus で置き換えられる.

$f(a_1, \dots, a_j, \dots, a_n) \cdot x_1^{a_1} \cdots x_j^{a_j} \cdots x_n^{a_n}$ を考える. $f(x_1, \dots, x_n)$ には,

$a_j = 0$ (したがって, $x_j^{a_j} = \bar{x}_j$) の場合の

$$\begin{aligned} & f(a_1, \dots, \overset{\text{第 } j \text{ 項}}{0}, \dots, a_n) \cdot x_1^{a_1} \cdots x_j^{a_j} \cdots x_n^{a_n} \\ &= f(a_1, \dots, 0, \dots, a_n) \cdot x_1^{a_1} \cdots \bar{x}_j \cdots x_n^{a_n} && (x_j^{a_j} \text{ の定義}) \\ &= f(a_1, \dots, 0, \dots, a_n) \cdot x_1^{a_1} \cdots (1 \oplus x_j) \cdots x_n^{a_n} && (\text{補題 5.10 (5)}) \\ &= f(a_1, \dots, 0, \dots, a_n) \cdot x_1^{a_1} \cdots (x_j \text{ 欠如}) \cdots x_n^{a_n} \\ &\quad \oplus f(a_1, \dots, 0, \dots, a_n) \cdot x_1^{a_1} \cdots x_j \cdots x_n^{a_n} && (\text{補題 5.10 (4)}) \end{aligned}$$

と, $a_j = 1$ の場合の

$$f(a_1, \dots, \overset{\text{第 } j \text{ 項}}{1}, \dots, a_n) \cdot x_1^{a_1} \cdots x_j \cdots x_n^{a_n}$$

の両方が \oplus される。よって, $\langle nC_i \rangle$ に j を含む積項 $x_1^{a_1} \cdots x_j \cdots x_n^{a_n}$ の係数には $f(a_1, \dots, \overset{\text{第 } j \text{ 項}}{0}, \dots, a_n)$ と $f(a_1, \dots, \overset{\text{第 } j \text{ 項}}{1}, \dots, a_n)$ の両方が \oplus されて $(\cdots \oplus f(a_1, \dots, \overset{\text{第 } j \text{ 項}}{0}, \dots, a_n) \oplus f(a_1, \dots, \overset{\text{第 } j \text{ 項}}{1}, \dots, a_n) \oplus \cdots) x_1^{a_1} \cdots x_j \cdots x_n^{a_n}$ となり, 一方, j を含まない積項 $x_1^{a_1} \cdots (x_j \text{ 欠如}) \cdots x_n^{a_n}$ の係数に \oplus される $f(a_1, \dots, a_j, \dots, a_n)$ は $f(a_1, \dots, 0, \dots, a_n)$ でなければならない。

これは (5.5) が任意の j について成り立っていることを意味し, したがって, (5.4) 式が成り立つ。

〔例 5.12〕 リード・マラー展開

$$\begin{aligned} (1) \quad f(x_1, x_2) &= f(0, 0) \oplus x_1 \{f(0, 0) \oplus f(1, 0)\} \\ &\quad \oplus x_2 \{f(0, 0) \oplus f(0, 1)\} \\ &\quad \oplus x_1 x_2 \{f(0, 0) \oplus f(0, 1) \oplus f(1, 0) \oplus f(1, 1)\}. \end{aligned}$$

例えば, $f(x_1, x_2) = x_1 \oplus x_2$ はこれ自身がすでにリード・マラー標準形であるが, あえて定理 5.8 を用いてみると,

$$\begin{aligned} f(x_1, x_2) &= 0 \oplus x_1(0 \oplus 1) \oplus x_2(0 \oplus 1) \oplus x_1 x_2(0 \oplus 1 \oplus 1 \oplus 0) \\ &= 0 \oplus x_1 1 \oplus x_2 1 \oplus x_1 x_2 0 \end{aligned}$$

であり, 当然であるがこれは $x_1 \oplus x_2$ に等しい。

$$\begin{aligned} (2) \quad x + y &= 0 \oplus x(0 \oplus 1) \oplus y(0 \oplus 1) \oplus xy(0 \oplus 1 \oplus 1 \oplus 1) \\ &= x \oplus y \oplus xy. \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
(3) \quad f(x_1, x_2, x_3) = & f(0, 0, 0) \\
& \oplus x_1\{f(0, 0, 0) \oplus f(1, 0, 0)\} \\
& \oplus x_2\{f(0, 0, 0) \oplus f(0, 1, 0)\} \\
& \oplus x_3\{f(0, 0, 0) \oplus f(0, 0, 1)\} \\
& \oplus x_1x_2\{f(0, 0, 0) \oplus f(0, 1, 0) \oplus f(1, 0, 0) \oplus f(1, 1, 0)\} \\
& \oplus x_2x_3\{f(0, 0, 0) \oplus f(0, 0, 1) \oplus f(0, 1, 0) \oplus f(0, 1, 1)\} \\
& \oplus x_3x_1\{f(0, 0, 0) \oplus f(0, 0, 1) \oplus f(1, 0, 0) \oplus f(1, 0, 1)\} \\
& \oplus x_1x_2x_3\{f(0, 0, 0) \oplus f(0, 0, 1) \oplus f(0, 1, 0) \oplus f(0, 1, 1) \oplus \\
& \quad f(1, 0, 0) \oplus f(1, 0, 1) \oplus f(1, 1, 0) \oplus f(1, 1, 1)\}.
\end{aligned}$$

例えば, $f(x, y, z) = x \mid (y \downarrow z)$ は, その真理表

a_1	0	1	0	1	0	1	0	1
a_2	0	0	1	1	0	0	1	1
a_3	0	0	0	0	1	1	1	1
$f(a_1, a_2, a_3)$	1	0	1	1	1	1	1	1

にもとづいてそれぞれの $f(a_1, a_2, a_3)$ の値を上のに代入すると,

$$\begin{aligned}
f(x, y, z) &= 1 \oplus x(1 \oplus 0) \oplus y(1 \oplus 1) \oplus z(1 \oplus 1) \\
&\oplus xy(1 \oplus 1 \oplus 0 \oplus 1) \oplus yz(1 \oplus 1 \oplus 1 \oplus 1) \oplus zx(1 \oplus 1 \oplus 0 \oplus 1) \\
&\oplus xyz(1 \oplus 1 \oplus 1 \oplus 1 \oplus 0 \oplus 1 \oplus 1 \oplus 1) \\
&= 1 \oplus x1 \oplus y0 \oplus z0 \oplus xy1 \oplus yz0 \oplus zx1 \oplus xyz1 \\
&= 1 \oplus x \oplus xy \oplus xz \oplus xyz
\end{aligned}$$

となる. この式変形の過程では $x \oplus 0 = x$ や, $x_1 \oplus x_2 \oplus \cdots \oplus x_n = 0$ (1 が偶数個の場合), $= 1$ (1 が奇数個の場合) であること (問 5.27 (4) 参照) を使っている.

定理 5.8 (任意のブール関数は $1, \cdot, \oplus$ だけで表わすことができること) は, ブール変数を 1 つも含まないブール関数 (すなわち, 定数 0 または 1) の場合にも成り立つことに注意する. 実際, 定数 1 については自明であるし, 定数 0 は $0 = 1 \oplus 1$ である.